

53 会ひみてののちの心はいつしんに三十余年恋ひつつ憎む

田中薫 (昭和二三)

権中納言敦忠のへ逢ひ見てののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけりを下敷きにするが、十世紀の敦忠の歌の軽さとは異なり、この心には重い桎梏が課せられている。会った相手は夫。所帯を持ち、子ができても妻が夫を恋う気持ちに変わりがなかった。しかし、夫の心は別に向く。恋う気持ちが強いほど募る憎しみ。最期を看取ってもなお残る愛憎の、海溝のような深さに読む者はたじろぐ。『土星蝕』(令和元年)から。(加古)

54 待ちをれば夕べ淡雪ふり籠めて駅は明かりの島となりたり

奥山かほる (昭和二三)

奥山は見つめる人である。その視線の先には山河があり、街があり、人がいる。掲出歌は「駅」を見つめた一首。「駅」は列車が停車し、発車する空間である。人々が行き交い、やがて去ってゆく。人は「駅」に留まることはない。奥山はそんな「駅」を「明かりの島」と表現した。私はこの作品を叙情歌と読む。人が乗り降りし、消えてゆく「駅」。それはあたかも人の一生を象徴しているようである。「心の花」平成一四年七月号より。(田中拓)

55 菓禍にて尾部膨らませ歪む背の切り身となれば見分けのつかず 加賀谷実

(昭和二三)

歌集『海の揺籃』(平成二三年)所収。加賀谷は秋田で魚介類の販売・加工を生業としている。大量に取り扱う魚の中には、化学物質に汚染された水などで尾が膨らみ、背骨の変形したものもあるという。そういった魚は捨てずに、切り身にすれば正常な魚と同様に取り扱われるという、衝撃的な暴露がこの歌の見どころである。また、この歌は、変形した魚を知らずに食する人間が抱く「海洋汚染への無関心さ」への警告とも取れる。(青山)

56 十キロで三千円を切る米の出でし頃よりこの世乱れつ

馬場昭徳 (昭和二三)

『大き回廊』(平成一五年)より。竹山広が「明朗闊達な働き者である」(『河口まで』「跋」と評した作者は、長崎市で米屋を営んでいた。実直な生活者の視点で詠まれた社会詠は説得力がある。引用歌の「頃」は一九九〇年代後半と推測。作者は正直な労働に真つ当な評価がされない社会は歪んでいると言うのだ。全身で働く日々を映した一首を引く。〈精米を終へたるわれは新米の香りはつかにまとひあるらん〉(『河口まで』)(河野)